

浄土

monthly
JŌDO

5

May 2006





往生のためには念佛第一なり。

学問すべからず。

たゞし念佛往生を信ぜんほどは

これを学ぶべし。



浄土

2006/5月号 目次

月刊「浄土」通巻800号記念講演会概録

平和のために仏教とキリスト教の対話.....	2
表紙の言葉.....	梶谷佳加 11
出雲紀行第3回.....	森 清鑑 12
会いたい人 黒鉄ヒロシさん②.....	関 容子 24
コラム.....	佐々木美冬 31
響流十方.....	林田康順 32
シネマ随想.....	袖山榮眞 36
コラム.....	大室了皓 42
Jフォーラム.....	43
浄土誌上句会.....	選者=増田河郎子 44
マンガ さっちゃんはねっ.....	かまちよろう 47
編集後記.....	48

表紙題字=浄土門主 中村康隆親下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎



平和のために、 仏教と キリスト教の 対話



成田有恒

浄土宗大本山増上寺法主

岡田武夫

日本カトリック東京大司教

月刊『浄土』
通巻800号記念
講演会概録

本年1月31日、東京プリンスホテル、
マグノリアホールにて行われた、
本誌通巻800号の記念講演会の内容を
2回に分け抜粋してお送りします。

文責 編集部



I

岡田 本日このような機会をお与えいただきまして、本当にありがとうございます。心から御礼申し上げます。著名な作家でもいらっしゃる成田台下とこのようにお話しできますことを、大変うれしく光榮に存じます。

今日の世界、そしてこの社会の中で生きております私どもは、本当にさまざまな課題、問題に遭遇しております。私ども宗教者はそれぞれ創始者と申しますか、開祖様と申し上げるのでしょうか、その教えに従い、一人ひとりが大切にされる世界となるように努めていかなければならないと考えております。宗教者は特に平和のために働く人でなければいけないのではないのでしょうか。

私どもカトリック教会では、元旦が「世界平和の日」とされております、同時に「聖母マリアの日」になっております。そして、世界中で聖母の取り次ぎを願って平和のために祈るということになっております。私の担当しております教会でも0時に集まって、平和のためにミサを捧げております。

キリスト教ではクリスマスはたくさん人が来てくれるんですが、元旦の深夜のミサが寂しいんですね。非常に残念に思っております。

聞くところによりますと、ご法主が大僧正をしておられますこちらの増上寺の大晦日の風景ですが、たくさんの方が集まる。若い人がたくさんいる。外国人もたくさん集まっております。

そして、風船が何かを飛ばして、みんなが和気あいあいとし新しい年を迎える心の交流、触れ合いがあつて、カウントダウンと言うのでしょうか。見ていなくて聞いただけですが、やはり世界人類の平和のために祈念しているというように聞きました。今

年の様子はぜひ拝見したいなと思っております。もちろん、自分のほうも同じ時間になければいけないことがあります。

そういうことが一人ひとりを平和のために駆り立てる大切なことではないかな。うまく人々の生活、習慣に溶け込んで、人類が民族や言語や習慣を超えて、平和のために尽くそうという気持ちを醸し出してくれる。そういうものかなという気がしております。大変失礼でございますが、増上寺ではそういうことはどのようにして始まったのでしょうか。どのようなお考えだったのでしょうか。

成田 今増上寺の大晦日の行事のお話になりました。どういうふうにして始まったか。これは余り根拠がないんですが、いつのころからか、この数年前から若い人が集まってきました、除夜の鐘をつく直前からいわゆる10カウントをするようになりました。

仏教では10カウントはないんですが、私どもはワンと言いましたら南無阿弥陀仏。ツー、南無阿弥陀仏。必ずお念仏。これはお十念と一緒にになりますから、お念仏を一緒に唱えます。

去年の大晦日、12月31日は約三万数千人の人が境内に集まりまして、これはよそのお宮さんや明治神宮、川崎大師、成田山に比べると物の数ではないかもしれませんが、ここにお参りに見えた方は遠くからおさい銭を投げるのと違いまして、全員に何らかの行動をしてもらいます。

これにはまず10カウント。さらには、最後の10になりますと、風船を夜空に放ちます。これは先着順、五千個だけ皆さんに配っているわけですが、それではとても足りないんです。それを夜空に上げてくださる。

大本山増上寺には、本堂に向かって左手に昔は五重の塔がありました。ところが、この五重の塔が戦時中にB29の空襲で焼けました。五重の塔が焼けるというのは大変すごい姿だそうでした。私は見たわけではありませんが、子供のときにそれを見たというご近所の人の話によると、真つ赤な朱の流れが天の上からダラダラッと流れ落ちるような焼け方だったそうであります。

残念ながら、まだ増上寺の資力では五重の塔を復元するわけにはいきません。幸いなことに、場所は反対側ですが、ご本堂の右側のほうに「五重の塔」が下から上へ建っております。いわゆる電光に輝く「東京タワー」というものがちょうど右側にあるんです。そして、五重の塔が焼け落ちてくるように、地上から空に向かってそびえておりまして、まことに風景がよろしゅうございます。

三万五千人と人数は大したことないかもしれませんが、もちろん境内にはそれ以上は入りきれません。去年あたりはお断りをするような状況でありました。

やはり、信心があらうとかならうと、人間というものはそういう節目のときには何か行動したいというものがあるのではなからうか。だから、仏教、キリスト教に限らず、宗教というものはそういうものに答えていく必要があると思います。

岡田 キリスト教というのは日本では少数派でございます。日本にキリストが伝えられてからはまああの年月、四五〇年ぐらいたっておりますが、日本の方々の心になかなか届かない。私たちはそういうもどかしさを持っています。

既に日本には偉大な宗教家がいて、そして苦しみ悩む人々に、キリスト教的な言い方をすれば救いの道を示された。法然上人はその代表的な方だと存じます。私どもは

その偉大な先人たちからも学びたいと考えているわけでございます。

二三年前ですが、私はドイツのケルンというところに参りまして、ケルンのカトリック教会でお話をしました。そのときに、今の日本はどうなのかという話を話すようにと言われたので、いろいろ話した中に、実は日本人はいろいろ悩みや苦しみがあつて、特に大都會では寂しい思いをして暮らしている者がいる。そして、孤独に苦しんでいる。自殺する人が結構いる。三万人ぐらいいるんですと言いました。

そうすると、ちょっと一けた違うんじゃないですかと聞かれたので、いや、確かに三万人ですと答えました。それで大変驚かれました、日本は戦後経済的にすぐに復興し成長して、豊かな生活をしていると聞いているけれども、どうしてそういうことになるんだろうか。やはり、日本の宗教はそういう人々に対して何をしているのか、と問われたような気がいたしました。

昔、13世紀に法然上人が出られた時代は、源平争乱の時代で人々は塗炭の苦しみをなめ、本当に心に大きな苦悩を抱いておられた。そういう人々に救いの手を差し伸べられたのが法然上人ではないのかなと思っております。

今、私も宗教者は、多くの悩み苦しめる人のために、もっとわかりやすく受け入れやすい私たちのプレゼンテーションというか、自分たちの信仰を伝える努力が必要ではないだろうかと考えております。

きつとどの宗教団体もそう考えていると思いますが、浄土宗ではそういうことはいかがでしょうか。

成田 一昨年の統計によりますと、日本人の自殺者は三万四、九二七人だそうござ

います。これはアメリカの自殺者の倍、イギリスの自殺者の四倍だそうで、日本人は非常に平和だ、富んでいるというにもかかわらず、非常に自殺が多いわけでございます。

ところが、この法然上人様の教えでは自殺は絶対に許されない。この辺はカトリックも同じではなからうかという気がしますが、いかがなものでございますか。カトリックの自殺に対する考え方をちょっとお伺いしておきたいと思います。

岡田 私どもでは自殺はもちろんいけないこと。命は神様のものですから、神様だけに属するものですから、自分で自分の命を処分することはいけませんということです。そして、以前は自殺した人は葬儀も許されなかった。そういうことがございました。

ですが最近、我々というか教会の考え方は微妙に変わってまいりまして、自殺といっても本当に意識して、理性が判断して自分の命を絶つということはむしろ少ないだろう。病気になるいろいろな障害があつて、自分で正常な判断ができないまま、いわば事故のような形でこの世を去ってしまう人もいるだろう。

本当にその人がこの世を去るときに、神の前でどのような状況にあつたのか、どのような心を持つて神様と出会つたのか。それはわからないことであると考え、そして「自死」といいますか、自分で死んでしまった人も、神の広い大きな慈しみに委ねて、神様がその人を受け止めてくださる可能性は十分にあるんだと、私たちは信じ、その人たちが神の下で憩えますようにと祈りを捧げるようにしております。

どのような最後を遂げたとしても、その人の魂が神様の前でどのような状態にあるかは、私たちが軽々に判断してはいけません。やはり神様の慈しみに信頼して、私たち

は地上でできる供養をしましょう。そういうように今私たちは言っております。

成田 法然上人様のお言葉にも、人の命というのは食事をしている間にも急に死ぬことがある。だから、かむ度に南無阿弥陀仏。それを飲み込むときも南無阿弥陀仏と言つて、ぐつと飲み込みなさいというお言葉がございます。

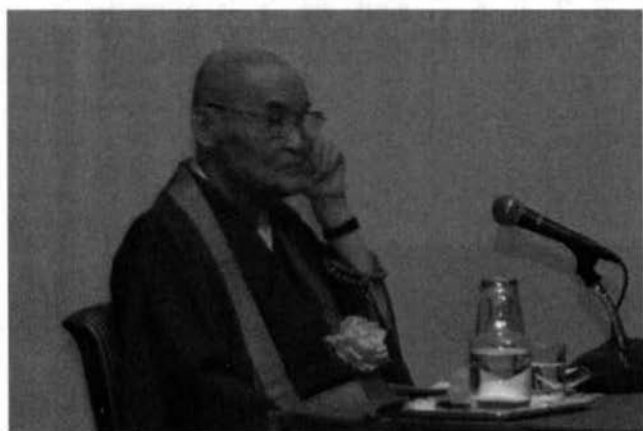
このように、死というものはある意味で自然というか、場合によっては仏様のお迎えがあると我々は言っていますが、いつどういふところに来るか分からない。しかし、自分の手でそれをどうのこうのするということは、やはり許されないというのが法然様の教えでございます。

それから、近年でもベトナムでありましたが、焼死というものがありまして、現実にも今でも那智の滝の辺りに行きますと、昔の焼死するお坊さんが釜の上で死んでいったお釜が残っております。結構自殺を美德とする時代もあったんじゃないかと思ういます。

そういう時代に法然様が出まして、どんなに苦しくても、どんなに辛くても、病が重くなつても、絶対に最後まで生きなければならぬ。これを教えていらつしやる。

そしてそういう人間に何ができるか。お念仏ぐらいはできるのではないか。自分のためだけじゃない。人のために一声でも多くお念仏を唱えなさいと教えていらつしやるわけです。

戦国時代の末期から江戸時代にかけて日本にやってきましたキリシタンの方々の歴史を見ると、殉教者がたくさん出ているわけですが、あれを見ると自殺者はいないんですね。みな処刑されたりいろいろな死に方をされた殉教者ですね。自殺というのはほとん



ど聞きませんね。

岡田 殉教と自殺は違うわけであります。殉教は信仰を理由に迫害を受けて、自分の意思で信仰を守る。その結果、命を奪われる場合、信仰のゆえに命を捧げるということが殉教ということですよ。

ですから、ほかの理由でいやなことがあるとか、苦しいから自分でこの世を去ってしまうということとは根本的に違います。自殺と殉教はするように区別しております。

殉教者は、自分の信仰を命をかけて証した人として、教会ではずっと尊敬してきました。そして、この世界から神の世界といいたまうか、キリストの復活した世界に入れていただけるという信仰だと思って、この世の命の終わりではない。キリストの復活にあずかることができる。それはそういう約束というか、自分のために命を捨てる者は、必ず永遠の命に入ることができますよ、というキリストの言葉への信仰に基づいて命をささげる。そういうふうには信じ、教えているわけです。

(つづく)



写真提供：浄土宗文化局

Kajitani Yoshika

梶谷佳加

比叡山の麓の小さな工房で、
その土地の土を丹念に練って、
陶人形を作っている一人の女性がいます。
郷土人形のような、
土の香りのするその人形たちから、
たくさんぬくもりが伝わってきます。
誰もがみんな持っていた童心。
誰もがみんな大事にしていた童心。
そして誰もがみんな持ち続けたい童心。
そんな私たちの心に、
人形たちが呼びかけてくれています。

1970 奈良県生まれ

1988 京都芸術短期大学造形芸術学科陶芸コース入学

1989～入選歴

中日国際ビエンナーレ、京展、関西展

奈良展、天展、美濃国際陶磁展、長三賞展

1992 京都芸術短期大学陶芸コース専攻科修了

1997 滋賀県大津市山中町に独立

<http://www.eonet.ne.jp/~kajitani/>5月号は
鯉幟

黄河上流に竜門と呼ばれる急流があった。鯉
がのぼったとき、体より眩しい光を放ちながら龍
となり、悠々と天に昇っていったという伝承があ
る。すなわち鯉は「成功」や「たくましさ」を表す
魚となり、これにあやかり、子どもの成功や幸せ
の願いをこめて「鯉幟」を立てるようになった。唱
歌「こいのぼり（♪ 甕（いらか）の波と 雲の波）」
の三番に「♪ 百瀬の滝を 昇りなば たちまち
龍に なりぬべき 我が身に似よや 男子ご
と 空に躍るや 鯉幟」の歌詞がある。（編集部）

表

紙

の

言

葉

出雲

紀行

第三回

森清鑑

井戸平左衛門

大森の代官屋敷から銀山川を渡り、少し登った左手に井戸神社はある。瀟洒な社ではあるが地元の人々の畏敬を一身に集めている。この神社だけは、素通りするわけにはいかない。祭られているお人は井戸平左衛門。彼は、いかなる人物で、何を行ったのか。

享保十六年（一七三一）の初秋の早朝、古老の武士と家来数名の一行は今にも雨が落ちそうな曇天のもと、壮麗にそびえ立つ芝増上寺の三解脱門に向かって深々と旅の安全を祈願した。当時の芝増上寺は將軍家の御霊屋（霊場）として浄土宗の東の大本山として、今とは比べものにならない規模を誇っていた。旅の一行は、将監橋を渡り、札の辻を抜け、泉岳寺近くの高輪の大木戸に辿り着いた。一八世紀末まで東海道を挟む両側に巨大な石垣と木戸が築かれ、ここで人馬や荷物などの検

査をしていたのである。いわば江戸の表玄関であり、ここから内側が江戸とされていた。木戸の役人は笑顔で旅の無事を挨拶した。古老の武士は駆けつけた親類・縁者と最後の別れをかわし、「必ず帰る」の一言を残して家来と従僕の二人を連れ、左に芝浦の海を望みながら東海道品川宿に向かって歩いていった。これから出雲、その先の徳川天領地の石見大森銀山に向かつての約三百里の長旅が始まったのである。

白髪古老の武士は井戸平左衛門正明、このとき六十歳。通常なればとつくに隠居の身である。江戸に生まれ、江戸で育ち、大岡越前守忠相の懐刀として勘定役（財務官僚）として極めて信任あつく、単に能吏であるばかりでなく、その人格高潔なること比類なしと讃えられた人物であった。その彼が六十歳にしてこの七月の始めに、大岡から「石見銀山領支配を命じる」との令達を受けたのであった。大森第十九代の代官。この人事は一体どのよ

うな意味を持つのであろうか。

銀の産出量は、慶長年間の約五千貫をピークに年々減少している。平左衛門着任時には年産百二十貫程度まで落ちていた。間歩（坑道）を深く掘り下げる。湧水に阻まれる。採掘は困難を極めていた。誇張だとは思われるが最盛時二十万人といわれた人口もこの頃には急減している。鉱夫の労災の危険性も増大している。こうした状況下での銀山経営の建て直しを平左衛門に託したという見方がひとつ。また、当時の天領石見銀山領は銀山の他に百八十二ヶ村五万石を支配していたので、その代官を務めることは榮転であったと見ることができる。

江戸には長男の伊織敬武（おりのりたけ）がいる。学問に長じ、心根やさしい自慢の息子である。すでに勘定役に列せられ、申し分のない後継者である。ただ惜しむらくは身体が丈夫でないことだ。平左衛門が江戸を出立する際にも発熱し床にあった。本人は断固として「高輪の木戸

までお送りします」と申し出たが平左衛門は「無理をするな。永久の別れではあるまいし」と説諭した。この親孝行の息子は目に一杯の涙をため道中の無事と新任の仕事成就を祈った。

平左衛門は大坂から船で尾道に出て、銀の路伝いに駕籠を乗り継いで大森に向かった。三百里に及ぶ長い道中を二十日あまりで到着したというからかなり急いだのであろう。元来、頑健というほどの肉体の持ち主ではなく、ましてや老齢に及んでのこの長旅は平左衛門にとってはかなりきつかったと推察される。

大森に近づくくと代官配下の役人達がすでに迎えに来ていた。挨拶を交わし、彼らは白髪の老体だが端正な顔立ち、凜と背筋がとおり、品のある穏やかな江戸弁を話す新代官にこれまでの代官とは異なる感覚を受ける。江戸の雰囲気そのものを醸し出している新代官に対し彼らは一様に「これまでと同じさ。江戸では有能であったかも知れぬが、現地のことは

まるで知らないし、ましてやこの老齢では栄転としての任務期間を大過なく勤め上げてなすこともなく帰国の途につくのが落ちだ。辺地の行政にまともに対峙する情熱などはない」と思った。特に配下の役人の一人、伊達金三郎にこの思いは強かった。農民や鉾夫のために義を重んじ、これまでの代官に裏切り続けられ、切齒扼腕して

きた金三郎は冷めた目で役人の末席から新代官を眺めていた。むしろ待ちかまえている役人の中で最も強く、代官たるものに不信任感を持っている人物であった。最初のお目通りの際に、平左衛門はこの若者の鋭い眼光に着目し、有為な人材であることを見抜く。

そこは江戸で大岡越前のもと有能な士として鳴らした平左衛門の眼力である。彼は末席のこの若者の名を問い、「金三郎と申すか。今後、よろしく頼む」と声をかける。くだん



◆往事のまま復元された大森代官屋敷

の若者は一瞬うろたえ「これまでのお代官とは違う」とつぶやく。しかし、同時に「最初だけだ。きつとそのうちに馬脚をあらわす。あらぬ期待はせぬことだ」との思いが心にこだまする。

着任してみると、職務の事態の深刻さは想像の域をはるかに超えたものだった。まず、江戸では到底考えられぬほどの凶作が待ち受けていた。平左衛門の最晩年の人生を変える大難事が次々と襲ってきたのである。彼は主立った役人から鉾山経営、農業政策の実情を聞く。「なにしろ現地のことはなにもわからんのでなあ」とつぶやきながら、前任者の残した帳簿や資料をばらばらとめくり、目を通す。現地を視察する。そのときには必ず金三郎を呼び、ともに従える。金三郎にしてみれば有り難迷惑のようなものであった。平左衛門はことあるごとに金三郎に質問する。本当の内情を何処まで答えたらいいものか。油断は禁物と金三郎の顔には書いてある。それは

そうである。ここ数年、当地では凶作が続いている。農民は年貢米の上納にあえいでいる。銀の採掘は減り、毛利氏が支配していた頃の露天掘りに近い銀採掘など夢のまた夢である。奥深く鉾脈を求め掘り下げたものの、出水により断念、新鉾を求めるにも成果が上がらず、ただでさえ人体に危険なこの作業のため、鉾夫の生活は辛酸を極めている。金三郎がこの実情を報告しても前任の代官はまるで何もしてくれない。そればかりか役人の末端としてかえって不利な立場に立てられ、うるさがられ、齟齬にされるのが落ちである。事実金三郎はそういう立場に立たされている。

平左衛門は立ちつくす。この農民の惨状と鉾山労働者の悲惨な生活は、遠く離れた江戸の華やかな生活からは想像もつかぬ現実であり、それが眼前にある。どうしたら良いのであろうか。江戸を出立する前は一応五万石の代官としての栄達の日々を思うこともあったが直面した事態ははるかに深刻でこれを解

決する方策といっても一代官の権限ではいかんともしがたいものばかりである。しかし、このままでは村民は立ちゆかなくなる。平左衛門が着任した享保十六年の秋はかくのごとき不作で、このままでは一揆も起こりかねない状況であった。どうしたらよいものか思い惑う。前任者と同様にこのまま見過ごそうか。ここで平左衛門の心に民を思う気持ちが湧き起る。手をこまねいている場合ではない。そして決然として立つのである。

農民の窮状を打開するために平左衛門はまず資金の出所を探る。そこで目をつけたのが商人であった。商人は米の生産に拘泥することなく、しかも活動の範囲が国（藩）や土地に縛られることもなく、ものの販売の他、物流・金融、酒の醸造など当時とすれば極めて広範囲の業務を展開することができ、大きな利益を上げうる立場にあった。平左衛門の時代にはすでに豪商が天下を制する時代が地方まで浸透していたのである。大名が豪商から

資金を調達する時代である。大森でもそのことは例外ではなかった。彼は代官屋敷に豪商を呼び寄せる。その利益内容を吟味する。しかし、決して事を荒立てるというのではない。着任早々というのに商人達は驚くべき慧眼にたじろぐ。平左衛門によって搾取や賄賂がやんわりと指摘されるが彼はそのことを決して糾弾しない。平左衛門は最後に切り出す。皆が食していくためには民なしにはあり得ない。いか豪商でも食わなければ生きて行かない。このことを切々と説く。「かといって私たちにどうすれば良いというので?」。「資金を供出してもらいたい。その金で他国の米を買って食うや食わずの農民にまず米を提供してもらいたい」と平左衛門。その真摯な態度に豪商達の心も動く。こうして飢饉で食えない農民の命をつないだ。それまでの度重なる農民への足運びとそこで農民の窮状を真摯に聞く平左衛門の姿に農民の方もこれまでの代官様とは違う。これまで訴えるすべも

ない農民の心が動く。平左衛門が次に打った手は一年間貢米の取り立てを免除する処置である。これには農民も驚いた。と同時に涙した。平左衛門は「告げ」の看板を立てる。危急の折、共に協力し、この大問題を乗り切ろうという主旨の看板である。このような処置は一代官としての職務権限を越えている。しかし、これらの対策も、いわば緊急処置であつて例年通りに米ができれば、問題解決にはならない。すでに刈り入れ直前にウシの大群が現れ、実った稲を食い荒し飢饉状態になる兆候が歴然として現れていたのである。こればかりは防ぎようがない。金三郎の報告は厳しい状況ばかりであつた。すでに金三郎はこの状況を何とか打開できないものかと代官に真意を伝えていた。最早、一役人としての立場云々の問題ではない。平左衛門に寄せる信頼は日増しに強まる。

その信頼を決定づけた出来事がある日に起こつた。平左衛門はいつものよう伊達金三郎

とともに石見銀山を視察する。そこには銀の採掘で胸を冒され、惨憺たる死病にとりつかれた人がいる。金三郎は独自に工夫してこしらえた漢方薬を与える。平左衛門は金三郎のこの独特の植物漢方療法に着任当初から着目していた。今、現実到目前で病み衰えていく人々になんとかならんかと思つてもやるすべがない。金三郎が一生懸命、煎じ薬を飲ますのを黙つて見ているほかない。平左衛門は彼に聞く。「おぬしのその漢方療法はいかにして知り得たのか」。そこで病人をただ同然で献身的に面倒を見ているところの医者を知る。その名は中島見龍。「見龍先生ですよ。お代官もすであつてはいます」。『おおあの大入道か』。実は平左衛門が着任当初持病の腹痛に見舞われ往生していたところ、この大入道の煎じた薬を飲むとけろりと痛みが治まつたのである。権威などものもしない、一見味も素っ気もないこの男が名医であると同時に徳のある人物であつた。金三郎に惜し

げもなく漢方薬の知識を伝授し、彼は懸命に薬草を採取し、病人に役立てていたのである。この日は鉾山で働く人々の実態を平左衛門が心底から知った日であった。徳川天領地として働く人々はまだ良いとして、いわば出稼ぎで来た人々の生活の悲惨さは、細々とした銀山経営の元では悲慘の一語であった。

平左衛門は、鉾山から降り立つと、「金三郎。ちよつとつきあつてくれまいか」という。そしてとある豪商の家に入る。そこで目にした金三郎の心は感激に打ち震えた。豪商と談判し、平左衛門の家計にとつておきの金一千両を鉾山で働く、悲惨な労働者のために用立てるというのである。江戸からその一千両が届くまで至急その豪商に用立ててくれないかという話である。金三郎は思わず、口走った。「お代官様、そんな無茶な」。「第一、江戸の跡取りの息子さんの承諾もなしに」。平左衛門は平然と言う。「あいつは必ずやつてくれる。そのことは心配ない」。「ところで江

戸から金が届く間、貴殿から同じ金額の金を借りねばならない。了承していただけるか？ 借りる以上担保がいる。すまないが我が家に伝わる家宝いっさいを担保にするのでお願いする」。家宝の目録を記そうとする平左衛門に対して、その豪商は「担保など要りません。平左衛門様。それくらいのことはこの私にやらしてください」。これから先、伊達金三郎は井戸平左衛門のためには命をかけるという心情に達する。

平左衛門は必死に米收穫の打開策に取り組む。ところが自然は待つてくれない。それが着任翌年の秋に起こった、いわゆる未曾有の享保の大飢饉である。着任当初から凶作にあっていた村々にまたしてもウンカの大群が襲い、西日本だけでも二万人の餓死者を出したという。九月、農民の必死の努力でたわなに実った稲が、空の色が変わったかに見えるウンカの大群に襲われたのである。次第に侵食されていく村々の畑の異変を最初に気づい

たのが金三郎である。青くなって平左衛門の元に駆け込んできた金三郎は、緊急の処置としてウンカの襲来を止めるために畑を焼き打つ処置を願ひ出る。しかし、それだけでは食い止められない。結果は惨憺たることになった。

そこに追い打ちをかけたのが最愛の息子伊織の死去の知らせであった。若干二十五歳。父親からの要請である銀山供与の一千両を即座に決断し、石見に送り届けたのち、元来病弱であったこの優秀な息子はついに病に倒れたのである。平左衛門の心情はいかばかりであったか。ことを知った金三郎は銀山の一件を目の当たりにしているだけに、お会いたことは無いが、「なんて偉い息子さんだろう」と心底から思っていただけに、当たりかまわず泣いた。未曾有の大飢饉に直面している平左衛門は江戸に帰るいとまもない。直ちに文を送り、これまた伊織と兄弟同然に育て、その子が平左衛門を慈しんでいる甥子を跡取り

とする。

ここに至って、餓死者が出ている農民を救う手だては、ご禁制の幕府の米倉を開陳し、民に配るしかないと平左衛門は決断する。幕府の米倉というものはそもそも戦の有事に備えておく、一種の兵糧米であって一代官がこの米倉を開くなどと言うことはすなわち幕府への謀反であり、当然切腹ものである。無論、そのことは大森代官といえども例外ではない。

金三郎は自ら申し出た意見とはいえ、平左衛門に直言する。「お代官様が米倉を開くなどと言うことは止めてください。私がやります。お代官様は知らなかったことにしておいて下さい。」「馬鹿を申すな。私はもう六十一歳だ。若いお前様にはこれから先、今の意志を継いでやってもらいたいことが山ほどある。あなたでなければそれはできない」。平左衛門は考えた。目の前で打つ手がなくて飢餓にあえいでいる人々を救うには、江戸に連

絡している暇はない。江戸がたとえ即断即決したとしても返事をもらうには優に二ヶ月はかかる。その間に間違ひなく餓死者が出る。そこで平左衛門は死を覚悟で江戸には知らせずに、幕府の米倉を開き民に分配した。領民はこのような代官様がこの世にいるのかと就任たった一年足らずの平左衛門に、まさに生神様だと感謝した。この決断のために大森管轄領では、最低の死者数を出すにとどまった。

しかし、これで問題は解決したわけではない。これからまた飢饉は襲ってくるのだ。ある日、平左衛門は金三郎を連れて両親や息子の菩提を弔うために銀山と大森町の分かれ目にある榮泉寺に立ち寄る。ここで全国を行脚している僧達に出会う。その一人は平左衛門が石見に就任する道すがら、幼い子供を助けんとする若い僧であった。久しぶりの挨拶を交わす。この僧侶の一人が思わぬことを口にする。「確かにこの村の食に悲惨な状況は、私ども他所と比べ尋常ではないと思いまし

た。確か薩摩を巡業しておりました折、当地ではサツマイモというのがありましてそれがために米の飢饉に遭遇しても民は命をつなぎ止めていると聞きました」。平左衛門はある種の天啓を得たように礼を述べた。いかにしてこの冬將軍がやってくる寒冷地にサツマイモを育てられるか。それができれば米の不作に悩もうとものにかく生きていける。

その場を立ち去った平左衛門は日がな考えを巡らし、行動に出た。まず薩摩からいかにしてサツマイモの種芋を入手するか。これは金三郎に頼む。しかし、薩摩と通じている道案内が要る。しかも、石見から薩摩まで幾多の関門を通らねばならぬ。これは比較的自由に関所を通れる僧侶の助けが要る。この任をあつた若い僧に頼もう。見ずとも知れぬ幼子を助けた、あの僧ならばもしかすると同行してくるに違いない。しかし、当時、薩摩に入るには江戸の幕府直属の隠密であつても不可能なほど警戒が厳重だ。これは直接幕府の認

可を得るしかない。

平左衛門がこのとき取った手段は、正に政治的判断であった。自分を任命した大岡越前に依頼し、江戸幕府から直接、江戸薩摩藩邸にサツマイモ種の受け取りを依頼する。これにはいかか薩摩藩とても認可を出さざるを得まい。薩摩藩は了承した。種芋の受け渡し場所は同じく幕府最南端の天領地、本庄（日向国、宮崎県）と決まった。金三郎とその若い僧侶は命がけの困難を克服して数ヶ月後に大森に戻る。温暖な薩摩と異なり、冬の厳しさの喻えようもないこの地で果たしてサツマイモが根付くものであろうか。そこは金三郎の情報頼りに近在の農家に配る。ここで問題なのは、サツマイモの栽培法のノウハウを薩摩藩から得ることができなかったことである。サツマイモの種芋を提供するというのが幕府の命令であって、その栽培法のノウハウまで求められているわけではない。これはけだし当然のことであった。ここから苦闘が始

まる。選ばれた優良農家の、どの家でも金三郎らが命からがら持ち運んだ種芋をことごとく腐らせてしまい、最早これまで。万策尽き果てた状況になった。しかし、この時、一軒の農家からサツマイモの栽培に成功したという朗報が届く。それが境港に近い農家の松浦与兵衛という農家で、名人といわれた農芸の持ち主であった。彼は厳しい冬の間、芋種を暖かな家の地中深くに埋め生育に成功したのであった。この朗報は平左衛門にとって神のお告げのごとく救われた思いがした。このことは青木昆陽が江戸、小石川の葉草園でサツマイモの栽培に成功する三年前のことであった。

大森代官就任からわずか一年九ヶ月。ひたすら民のために苦闘していたある日、江戸から幕府の米倉を開いたという理由で大森代官の職を解かれ蟄居の命が下った。幕府も分かっているのだが当時の法令により表向き致し方ないという処遇であった。大森を出る際に

はほんの形式の青網が駕籠に被せられた。平左衛門は、江戸に伊達金三郎というすばらしい人格、有能の士がいること、後事は彼に託すべしと折々伝えていた。別れ際、芋の栽培に成功した与兵衛の手を握り、ただ一言、全土に芋を広げてくれと述べた。金三郎は居たたまれなくなり、駕籠から離れ泣きじゃくっていた。多数の農民が、銀山の鉦夫が地べたに這い蹲って泣いた。前代未聞の光景であった。平左衛門は明るく笑って手のひらを上に向け起きろよ「よせよ」と江戸人のテレの表現をした。

瀬戸内海に面する岡山県笠岡市、こども平左衛門の兼務地であった。この地で平左衛門は死ぬ。笠岡の人々の待遇は暖かいものであった。口伝えに平左衛門の徳に皆が感銘していたのであらう。蟄居の身とはいえ、少しも不自由はなかった。平左衛門の死については、「いかにしても御法を破った。しかし、江戸の人々も平左衛門を罪人のように処罰はでき

ない。では、自ら自刃しよう」と果てた説と、元来強健な身体ではなく、しかも六十歳からの二年の苦闘で病死したとの二説がある。しかし、あの矢継ぎ早の困難の時に、五十年、百年先の手だてを、身命を賭して打ち立て得たことは、高潔な心の結露でしかないと思う。大岡は彼の死を聞いた途端「見事なり、平左衛門」と絶句したと言われる。

その後、天明の大飢饉、天保の大飢饉で何十万の餓死者が出た。しかし、石見、岡山県備後、備中の広大な範囲でサツマイモのお陰で一人の餓死者も出なかった。サツマイモは年貢の対象外であり、人々は自由に食することのできたのである。

将軍吉宗の時代に生きた平左衛門は、中国地方の農民にとって、命を救ってくれた神様の存在になった。当時の農民はすらすら字を書けわけにはいかない。そこで石柱を立て、「芋代官様」とか平左衛門の戒名を刻み、誰が通る畑の角に建てた。そして日々感謝の

意を表した。三百年近く経っても現存するその数は四百基は下らないという。

明治十二年大森に井戸神社建立。その後、明治四十三年大森は多大の寄付（当時の金で一萬五千元）を民間から募って、社殿を造営した。あつという間に寄付金は集まったという。鳥居にかかる扁額は勝海舟の書による。「今でもここだけは特別な神社です」とおっしゃった、地元ボランティアの歴史研究家ガイドさんの声が忘れられない。

江戸期において代官は民と政府（すなわち幕府）をつなぐ重要な接点で民と直接接する行政官であつた。考えてみれば、大名や幕府高官などは民と直接生活面で接する機会など薄かつたのではないか。日本国民が誇れる歴史はこの代官が立派だったことである。テレビでは悪の象徴であるかの如く喧伝されているが、代官が立派なればこそ江戸が三百年もの間、とにかく持続したと私は思う。大多数の代官はおそらく会社で言えば係長や課長の

存在で板挟みの中で民と接するが故に現場で苦しんだに違いない。そして徳川時代が三百年どうやらもったということは、いわば肉体の関節ともいえる代官が諸外国に比べ優秀だったのではあるまいか。それにしても井戸平左衛門は飛び抜けた存在であると私は思う。感謝。



◆井戸平左衛門に感謝し、農民が建てた頌徳碑

参考文献

杉本苑子「終焉」

野國總管甘藷伝来400年祭ホームページ

(<http://www.noguni-400.com/index.html>) 他

（著者プロフィール）

Mori&Associates代表。

環境・廃棄物調査等。その他

海外／国内の広告・マーケティング調査。

太極拳講師。

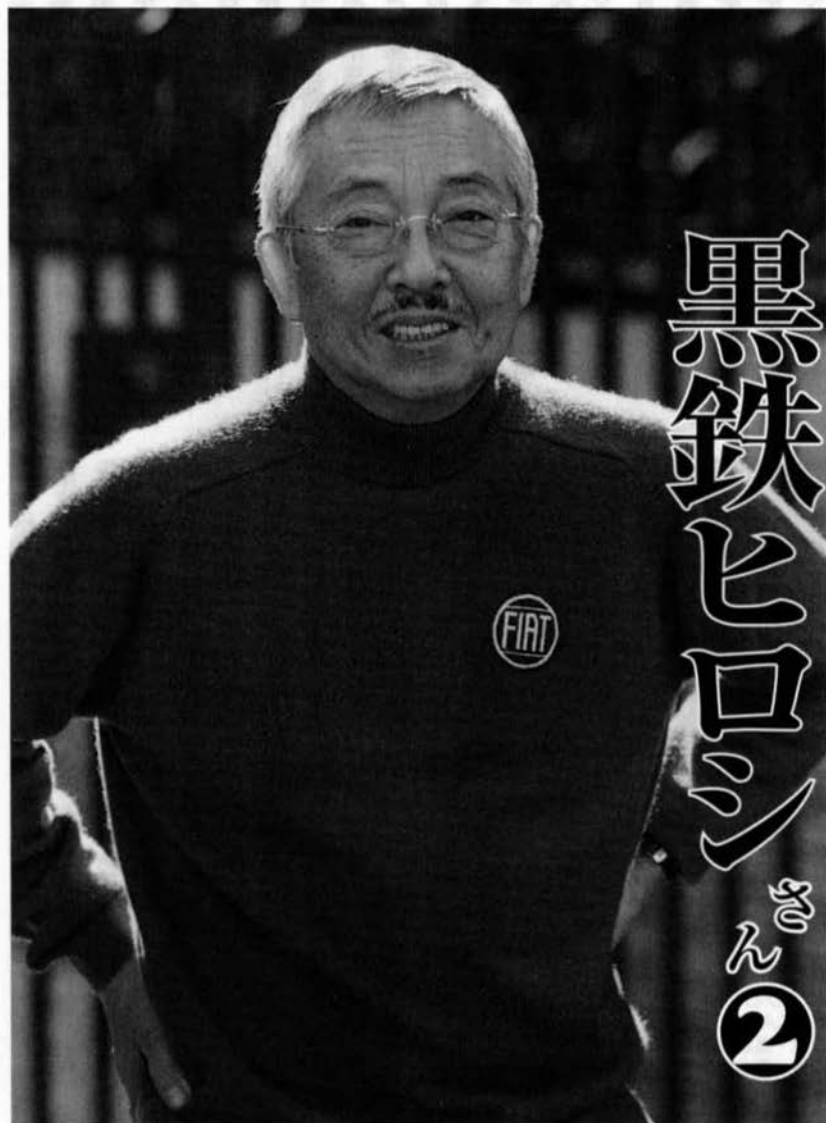


◆井戸神社

連 載

会いたい 関 容子 人

黒鉄ヒロシ
さん
②



撮影／タカオカ邦彦

黒鉄さんが精神的にも知識の面でも並外れて大人びた少年だったことは容易に想像がつく。

初恋はさぞ早かったことだろう。

「物ごころついたときから必ず好きな人がいましたね。初恋しまくり（笑）。映画とかの影響でしょうから、対象はまあどうでもよかったんです。好きな人がいる、ということが大事なんですね。ですから姉さんの人が多かった。上級生とか友だちの姉さんとか。うまくいなくて、よかったですね。今でも恋愛というのはよくわからなくて、イマジネーションの遊びのほうが楽しいですね。楊貴妃とかクレオパトラとかを呼び出して飲んだほうが面白い。実際の女性から、手編みのセーターもらって喜ぶ男と、気持悪がる男の、セクスの違いですかね。二年かかったのよ、なんていうのをもらったら、黙々と編んでるその時間の長さ考えただけでも気持悪いでしょう」

この、ちょっとニヒルっぽい恋愛観は、黒鉄さんが敬愛してやまない小説家、吉行淳之介さんからの影響が大きいのかも知れない。「自分がもてるわけないのに女から好きと言われて、あやしいと思わずにいい気になるから大事故に遭うんでね。吉行さんに聞いた話ですけど、友人が女と別れることになって、じゃあ最後の旅をしましょう、と言われて：男はバカですからね。女と別れるる上に行きがけの駄賃が手に入るんで、未練も当然あるわけなんで出かけて行つた。風呂上りにビールすすめられて、一気に飲んだら青酸カリが入つてた。検死に立ち合つたらしいんですが怖いぞお、って（笑）。まずビールが既に注がれている状況が怖いですね。目の前で栓を抜いたとしてもやっぱり用心しないとね」

しかし吉行さんが恋愛にそんな用心深い人だったとは思えないが。

「ちゃんと引つかけてますね。引つかかつ

会いたい人

関、容子



24～25歳の頃、高円寺自宅にて

たのかどうか……あれは覚悟の上の入水自殺
 (笑)、みたいなものだっただんじやないかな？
 女の手編みのセーターというセンチメンタ
 リズムに耐えられない黒鉄さんだが、でも吉

行さんが遺した吸いさしのタバコをガラスのペーパーウェイトに仕立てたというのは、自身では自身ではかなりおセンチなこともしている。

「わが家に麻雀しに來られてたんですが、最期となった晩の後始末で灰皿が目に入った。灰皿にある煙草の吸いがらの銘柄は、ぼくがピースで、井上陽水さんがマルポロで、吉行さんがハイライトだから誰のかすぐわかった。吉行さんが亡くなって、家事を手伝ってくれてる女性がこの灰皿掃除しちゃっていいですか？　って訊いてくれたんでついその氣になつてハイライトの吸殻をペーパーウェイトにしたんですけど、机に置いて毎日眺めているのがだんだんつらくなつてきて、村松友規さんに差し上げた。でも村松さんも眺め続けられる神経じゃなくて、書斎からリビングに移した、って言つてましたね」

黒鉄さんが吉行さんについて語るとき、男

が男に惚れるというのはこうしたことか、と実感させられる。

「女性の作家が、吉行さんに『四谷怪談』の色悪、民谷伊右衛門（たみや いえもん）をつくり、つて言つたらいいんですが、言い得て妙ですね。繊細で、病的なくらい氣を遣う人で、クルマで送つてくれるときなんか、どっちが送つてるのかわからないくらい氣を遣つて送つて下さった。自己犠牲の極みというか、達意の人というのか……人生のお手本みたいな人だった。電話をすると、ダメだ、もういけません、とか一応言うんだけど、自分の悲しみとか未練とか感傷に、最後まで引きこまなかつた方です。三島由紀夫さんが割腹自殺したときも、俺は自殺はしません。可愛そうだなと仰つた」

その昔、赤坂の「のなみ」という旅館に吉行さんたちが集つて麻雀に興じていた。私はそこに近藤啓太郎さんの原稿をもらいに行つたことがある。

「ええ、吉行さん、その近啓さん、阿川弘之

さん、佐野洋さん、写真家の秋山庄太郎さん、俳優の芦田伸介さん、漫画家では園山俊二さんとか福地泡介さんとかぼくとかが常連で、たまに井上陽水さんがゲストでくる。当時、芸能人の長者番付一位のときで、ジーンズでかつこよかったけど、彼も吉行さんのファンだった。みんなが騒ぎながら非常識な言葉を使うと、吉行さんはいちいち訂正はしなかったけど、アツと驚いたような顔をしてらした。たとえば、あなたのイズ（意図）がわからなとか、神社のケイナイ（境内）とかね。それから誤字ごつこというのが一時流行って、わざとシNTAXイタニマツタ（進退谷まつた）と言ったりね（笑）

文士の多い麻雀だからさぞ言葉には敏感だったに違いない。

「阿川さんは、お若いから御存じないのも無理はないが、と断つていろいろ教えてくれる。サカナ屋って言うと、あれは本来はウオ屋です、って。へ童謡の可愛い可愛いサカナ屋さ

ん、でおぼえちゃったんでしようけど、ウオが酒の肴になったときサカナになるんで、まだ手を加えてない原料はウオなんです、って」なるほど。でも歌舞伎の外題に『魚屋宗五郎』というのがあるが、これを略して『魚宗』と言ったりするので、ちよつとわからなくなってくる。

カーラジオで前後が判らず外国語のような「バックサンダヲアーム」という音を聴いて、阿川さんに「なんなんですかね」と尋ねてみた。見当がつくんですね。「麦藁帽のこじゃないか、そんな弱いモノで真田ヒモのように堅牢に編んだところで無駄、そんな意味だろう」。帰って調べてみると、「麦稈真田を編む」ではたして正解だった。

そして黒鉄さんは、しみじみと吉行淳之介を回想する。ほとんどのろけ話のよう。

「あるとき、のなみのおかみさんの部屋で小バクチをやってましてね、メンバーじゃない人が混じって、ちよつともめた。奥で麻雀

してる吉行さんたちに、大変ですよ、あっちでもめっちゃって、と誰かが御注進したら、もめ事の原因も訊かずに吉行さんが、クロがいるだろ、って言うてくれたそうで、これは今だに有難い。人は褒めなきやダメですね。信頼されたら絶対手は抜けない、という氣になります。これ、教育なんですよ。後輩に対する先輩のね」

手抜きをしない、ということから昔の絵本の話になった。

「講談社の絵本の武将物、『木村重成』とか『菊池武時』とかが好きでしたけど、これは当時の最高画壇の絵描きたちがまったく手控えずに描いてますから、まず子供はその画力に面食らっちゃうんです。テレビというものが出てきてからは、安易に説明しすぎて子供のイマジネーションがいつせいに発達しなくなったように感じます。相手が子供だからって手を抜いちゃいけない。キャッチボールで

も全力で投げてやると、大人のすごさつてものがわかる。ケガする程に投げちゃ駄目ですけど（笑）」

黒鉄さんはそれで美術大学への道を歩むことになったのか。

「まあ、中学高校のときに普通の勉強が面白くなくなつたから、というのもありますね。数学にはいまだにコンプレックスがあります。今考えると数学は宝の山ですね、0の概念とかすごいことなんです、学校でそこまで導いてもらわなかつたから、数学の魔法の沼に捉われなくてよかつたかな、と思つてます」

黒鉄さんの小学校時代はもっぱら映画館通いだったそう。

「映画は何でも好きでした。当時の映画館はフィルムが買い取りだったので、阪妻（ばんつま）阪東妻三郎の『雄呂血』とか、結構昔の映画も観てますね。映画館にはときどき実演というのがあって、エンタツ・アチャコの漫才も観てる、と言ったら色川武大さんが、クロちゃ

ん、それはどっちかがニセモノか、両方ニセモノだよ、って。戦後すぐのことですから、年譜を調べると二人はもうコンビを解消してるし、考えてみるとエンタツなんて人は、チヨビヒゲをはやせば誰でもなれたんですね。地方の小屋はニセモノのいい稼ぎ場で、エノケン（榎本健一）の実演というふれこみで、看板をよく見るとエノケソ、来たる、だったりしましたからね（笑）。高瀬実乗（みのり）という、アノネおっさん、ワシヤかなわんよ、とやって笑わせる喜劇俳優も本物かどうかわからないけど来たような気がするし、映画館は過去も見せてくれたし、現在進行形のものもあって、今思うとタイムマシンのようで没入しました」

黒鉄さんが、映画は何でもと言っても伝記物は好きじゃなかった、というのが興味深い。「エジソンとかワシントンとかリンカーンとか、成功譚なのが子供の身体に悪い（笑）。だいたい艶っぽくありませんね。それと悲

劇はダメ。野暮だし、泣かせようとする努力にシラけるし、逆に笑ってしまう（笑）。映画というのはこの世の物とは思えない架空の世界に連れてってくれるのが面白いんで、だから過去に行くと安心感があるんです。チャンバラ映画も好きですね」

ここで、クロガネロジックは一挙に急展開を見せる。

「チャンバラ映画とか、歌舞伎とか、相撲とか……過去に遡るものは粹だし、それを観るのが好きってことはぼくが墓石を見るのが好きというのに共通しているのかもしれないね。石に刻まれた名前を眺めてるうちにそのモニュメントを擬人化して、ああ、この人も生きてたんだな、とか感慨がわきますし、先祖代々の墓石が並んでたりするとそこに無情のドラマが起きるし、哲学的思考がそこにもここにも潜んでいるようで、時間を忘れまうね。変態ですかね？（笑）」

いささか季節が違うので恐縮だが、都々逸に「人には言えぬ仏があつて秋の彼岸の回り道」というのがある。「来し方の艶聞」を匂わせたものであろうか。向田邦子の小説に、墓参のたびにふと消えて、いつの間にか戻っている父親の場面があり、そこに何気なく引用されていた記憶がある。彼女は一九八一年、台湾旅行中、飛行機事故に遭い急逝した。他界して二五年もたつのに「時間ですよ」「寺内貫太郎一家」「阿修羅のごとく」「あ・うん」「だいこんの花」「七人の孫」などの珠玉のドラマはいずれも色褪せない。随筆を書き始めたとき、あの辛口批評の山本夏彦が「向田邦子は突然あらわれてほとんど名人だ」と激賞した。

小説でも「花の名前」「かわうそ」「犬小屋」などの短編連作で直木賞を受賞したが、乳癌の発病が機となって書き始めた随筆は特に心を打つ。彼女にとって「死」は身近なものであった。父親の死、恋人だったN氏の自殺。しかし、独特の機知と洒落た諧謔で彼女はそれを取り越えた。彼女の書く随筆の行間には、いわば仏教的諦観がある。そういえば、山本夏彦も亡くなり、今年は久世光彦も亡くなった。彼女に縁の深い人々もひとりひとり消えてゆく。

今年の花見を谷中の霊園に場所どりした私は帰途、墓地をふらふらと彷徨^{さまよ}った。艶聞などとは縁がないが「春の花見の回り道」である。

人のいのち終らんとする時、阿弥陀ほとけ聖衆とともに、目のまえに來たり給いたらんを、まず見まいらせてのちに、心は顛倒せずして、極樂に生まるべしとこそ心得て候え。されば（中略）いま一返も、病なき時念仏を申して、臨終には阿弥陀ほとけの來迎にあづかりて、三種の愛心を除き、正念になされまいらせて、極樂に生まれんとおぼしめすべく候。

（「往生淨土用心」）

臨終にあたり、阿弥陀さまが諸々の菩薩と共にその人の目の前にお迎えに來て下さり、そのお姿をまづ拝することによって、心うろたえることなく極樂に往生するのだと心得て下さい。ですから（中略）ともかくにも一遍でも多くのお念仏を称え、臨終には阿弥陀さまのお迎えを頂戴して、三種の愛心を払い除き、心静かな安らかな気持ちにしていただいて極樂に往生しようと思ひ定めて下さい。

阿弥陀さまの來迎をいただいてこそ

先日、終末期の患者さんが入るケア病棟を中心に活躍されている栃木県立がんセンター緩和医療部長の種村健二朗先生が、肺ガンを患っていた七十歳代の女性を紹介されたエッセーを拝見しました。当初、その女性は、死期が迫っているにもかかわらず、泰然自若とされていたそうです。種村先生は、その女性が歩んできた苦難の道が彼女をそうさせているのであらうと察し、「すごいことだなあ」と感心されていました。しかし、容態の急変を機にその女性の態度は次のように一変したということです。

*

患者さんが危篤状態から回復し意識を取り戻した。驚いたのは、あの泰然としていた患者さんの姿がなくなってしまったことだった。「どうかして。何とかして。死にたくない」と、それまでの自信に満ちた言葉づかいではなく、幼児化した態度で娘の名前を呼び続けた。ベッドの上の患者さんを娘さんが抱いて涙を流している場面にも出合うようになった。娘さんは、今までのあの毅然とした母親がオロオロする姿に変わって、どう接してよいのか途方に控えていた。再三、「どうしたらいいのでしょうか」と助けを求めてきた。その都度、「一緒に抱き合っているのですよ」と娘さんの行為を肯定してあげた。そのような状態のままで一週間ほどして亡くなられた。（死が伝えてくれたもの）『佛教情報』

誌・ムディター』二〇〇六・新春号

＊

患者さんの急変を目のあたりにし「自分たちのケアが間違っていたのではないか」と心を痛めていた看護師たちを前に種村先生が「お母さんが死ぬ間際になって取り乱し、必死に娘に助けを求めたことをよかった」と語られたこと、後日、母の葬儀を終えて報告に来た娘さんの「母は、今まで忙しそうにしていて近寄ることができませんでした。そんな母と抱き合うことができて本当にうれしかったのです」というメッセージにスタッフの心が癒されたことなどが紹介されていました。

ところで、法然上人ご在世当時、三種の愛心といって、臨終の際、人は三種の執着の心を起こすといわれていました。それは、①家族など大切な方、そして、自分が遺していくものへの愛着である境界愛、きょうがいあい②自身の存在そのものに対する執着である自体愛、③死後どうなるのかと憂える当生愛、とうしょうあいの三つです。そして、わが身の内から沸き起こる三種の愛心を自身の力で抑え心静かな境地になつてこそ、はじめて阿弥陀さまの来迎をいただくことができ、浄土往生が遂げられるのだと考えられていました。

けれども法然上人は、人が自身の力で三種の愛心を抑え込むことなど到底叶わないこととお見通しでした。そして、冒頭のご法語を通じて、死を目前にし

た私たち人間の心の弱さを阿弥陀さまは手に取るようにご存じで、だからこそ、お念仏を称えてわが名を呼んだ者の前に自ら来迎されて私たちの揺れ動く心を静めてくださるのだ、とそれまでの考え方を根底から覆して下さったのです。

来迎された阿弥陀さまは「心配には及ばない。私があなたをわが浄土へと導こう。そしてあなたは、わが浄土からしばし別れる大切な方々をしつかりと見守り、その者たちが念仏を相續するように促し続けなさい。さすれば、わが浄土での再会は確かなものとなるであろう」と優しく語りかけてくださるのでしよう。他ならぬ阿弥陀さまご自身からこうしたお諭しを直接いただければ、私たちの心は自ずと静まり、穏やかな気持ちに包まれることでしょう。

口には出さずとも、こうした三種の愛心が現代人の心の奥底にも厳として存在することに疑いを差し挟む方は少ないでしょう。人前ではそうした思いをおくびにも出さなかったこの女性も、心底ではどれほど思い悩まれていたことでしょうか。そんな心の叫びが娘さんの名前を呼び続けさせたのでしょうか。自分の名前を呼び続けるお母さんをしつかりと抱きしめ続けられた娘さんのぬくもりと阿弥陀さまの大いなる慈悲とが重なり合い、思わずお念仏を称えました。

合掌

(大正大学専任講師・林田康順)

母たちの村

監督

ウスマン・センベヌ



6月岩波ホールにてロードショー

かねて噂に聞いてはいたが、「ブラック・アフリカ映画」を見たのは、恥ずかしながら今回が初めてだった。だから——というより、にもかかわらずというべきか——初めて目にする筈のブルキナファソ国、ジェリツソ村の風物に目をさらすうち、「見覚えがある」との心証に戸惑いを禁じ得なかった。いわゆる認知障害の一種、既視感^{デジ・ヴユ}症候ではあるまいかとの不安にさいなまれ始めた頃、幸運にも疑惑を氷解させたのが、石の摺臼で穀物を潰すシヨットだった。ルーツは、四半世紀も前に読み耽った川田順造さんの『サバンナの博物誌』「サバンナの手帖」(新潮選書)のカットとして随所に鑲められていた、温雅なスケッチだったのだ！

試写会資料にセンベール監督が「この村の中央に有るハリネズミみたいな」と譬えるモスクに、まず「見覚えがあった」のも道理、川田さんの『アフリカの声』(青土社)を引用するならば「基層のごく一部に石灰岩を使っ

てあるほかはすべて日干し煉瓦と粘土と木でできており、雨や風や陽にさらされて崩れる部分をたえず補修するための足場として壁面から沢山の太い木の枝が長く突き出している……」。サハラ南縁の西スーダン地方独特の建築様式と知れば、まさに「腑に落ちる」。

さらにこの映画のメイン・テーマたる「割礼」についても「西アフリカ内陸社会では一般に男子の割礼はイスラームの浸透と結びあわされており……これに対して女子の陰核切除は、古くから西アフリカ社会でひろく行われていたらしい」と、性器を対象とする施術とモスクとの関連が性別によって明瞭、あるいは不明瞭である状況も明らかにされる。ただし、川田さんの親しんだモシ族の場合「急速にすたれつつある」と報告される女子割礼が、「アフリカ連合54ヶ国中、およそ38カ国で」行われている現況を訴え、この陋習^{ろうじつ}打破の「ために闘った母たちに」捧げようとの明確な意図のもとに製作されたのが、この作品

である。

ここいらで原題「モーラーデ」に話題を移すならば、一昨年二月に亡くなられた網野善彦氏の「史観」の根源に位置する「アジール」の一種である。「無縁・公界・楽」(平凡社選書)に例示される「縁切り寺」のように、そこに逃げ込めば如何なる権力も法の力も効力を失う「避難所」であって、「人類発達の或る段階に於いて、一般に(民族を問わず・筆者注)経験する風習又は制度」とされる。

農夫ジャトウが旅に出た直後、かれの第二夫人コレのもとに、割礼を拒否する四人の少女が「モーラーデ」を求めて駆け込む。七年まえ、娘のアムサトウに割礼を受けさせなかった「頼もしい小母さん」と見込まれたのだ。コレは少女時代に受けた割礼の後遺症で、流産を重ね、生死を賭した帝王切開のすえ授けられたアムサトウには、割礼を受けさせまいと決断した。それというのも、これがイスラ

ムの掟ではないことを、ラジオで聴いて良く知っていたからだ。エンディング・クレジツトに乗って高らかに歌い上げられる「昔から言われて来たことがある。でも割礼のことは書かれていない」という事に確信があったからだ。

そんなわけで、コレは土堀に囲まれたハジヤトウ邸(?)の出入り口に高さ十五センチ位の紐を張り「モーラーデ」を布告する。逃げ込んだ少女たちには誰も手出しできない。A・V・ジェネツプの『通過儀礼』(新思案社)によれば、この「不具化」(女性性器切除FGMのM)は何年かに一度、一定の期間を限って行われ、コレの村の場合たぶん七年に一度、期間も十日ぐらいと思われる。

文字どおり「未曾有」の事態に村中は大混乱。ハジヤトウの兄は長老会議の意向をうけ、留守中の弟に代わってコレの説得にかかるが、見事黙殺される。逃げ込んだ娘たちの母親も割礼師たちも、モーラーデの紐を跨ぐわ

けにはいかない。

こんなところへ、村長ドウクレの長男イブラヒマがフランスから帰ってくる。実はかれはアムサトウの婚約者だったのだが、割礼を受けていない女性を「ビラコロ」と蔑む父親たちは婚約解消を息子に迫る。ここで作品は目立たぬ一つのクライマックスを迎える。アムサトウは結婚できても、できなくても、割礼を拒否し抜く覚悟を凜然と、つつまじやかに母親に披瀝するのだ。

次なるハラハラドキドキのクライマックスを語る前に焚書に触れておこう。遠くは秦の始皇帝、近くはヒットラー、より近くは金正日に至るまで、独裁者による極端な情報規制の悪あがきの例は、枚挙に遑ないが、コレの反乱に手を焼く男どもは、「ラジオ狩り」を始め、遂にはモスクの前に集積されたラジオの山に火を放つのだが、この暴挙に対して私たちは「私らの心を閉じこめる」と不平を唱えつつも「無抵抗」を貫く。

そしてクライマックスの感動も崇高なる「無抵抗」から産み出される。旅から帰ったハジャトウは「家長としてのお前の権威はどうなっているのだ」との挑発と共に、兄から手渡される鞭を揮い、衆人環視のもと「モラーデを解く」と言え」と連呼しつつ、無抵抗の妻を打って、打って、打ち据える。ガンディーの「非暴力」の英姿を彷彿とさせ、法然上人が「忘れ難く」と述懐される、父君の遺言にも通底する「無抵抗の抵抗」が「空しからざるべし」との観客の祈念が叶えられる切掛けは、コレと同じ「知識」を共有する一人の男によって作られる。

ベルリンの壁を一挙に崩壊させたエネルギーは、電波に乗って伝えられる「知識」によって蓄積されたのだし、敢えて自らを省みて他を言うならば、この映画の登場人物たちについて、プラス・マイナス・ニュートラルを問わず、的確な感情移入を日本の観客たちに期待できるのも、文化人類学によって提供さ

れた貴重な「知識」の賜物にほかならない。

例によって蛇足。川田順造さんの最近著『母の声・川の匂い』（筑摩書房）に、若き浄土宗の住職と老檀信徒との間の羨むべき心の絆を伝えるエピソードがある。後者は川田さんの曾祖父、前者は近代浄土宗が生んだ名僧中の名僧、渡辺海旭大僧正（追贈）である。

蛇足その二、前項に比べると品格に格段の落差を感じるが、この機会に筆者宿年の疑問についてご教示を乞いたい。ミケランジェロのダヴィデ像のことだ。

『旧約』「サムエル記上」十七章でダヴィデはゴリアテを「無割礼のペリシテ人」と罵り、十八章では戦場において二百人のペリシテ人を討ちとり、人数分の「陽皮」を切り取って持ち帰った、とある。おのが性器の形状と寸法に甚大なる関心あるいは懸念を抱きつつ、銭湯で蒐集した日本人成人男性についてのデータに照らすならば、無理とは言わぬ迄も極

めて煩瑣な手続きと思われるが、先に引用したジュネップの本の「割礼」の項に付された「包皮の長さには人種によって大きな差があり、黒人やアラブ人たちの間には驚くほど長い場合がある」との注に接すれば、納得できるし、この習俗に関する異文化圏からの最古の記述というべき『歴史』において「陰部に割礼を施すのも清潔のためで、体裁より清潔を重んずる」エジプト人の衛生概念を評価するヘロドトスの「データ」の質と量も推定可能となる。

更に世界（ヘロドトスにとっての）で割礼を行う民族はエジプトとの通交の結果その習俗を学んだとの見解を示し、その中にパレスチナのシリア人を挙げているのも興味深い。パレスチナには割礼を習俗とする種族と、そうでない種族が混棲していたわけで「創世記」十七章が伝える神とアブラハムとの契約条項に「あなたたち男子はすべて、割礼を受ける。包皮の部分を取り取りなさい。これがわたし

とあなたたちとの契約のしるしとなる。……生まれながら八日目に割礼を受けなければならぬ」と規定される背景もほぼ明らかにする。

元来この習俗を持たぬ地域に教線を拡張したキリスト教の場合、『新約』「ローマの信徒への手紙」第二章に展開される「心に施された割礼こそ割礼なのです」の論理を根拠に廃棄された儀礼を、『旧約』一辺倒のユダヤ教が墨守するのは当然であり、『旧約』に立脚しつつも、割礼についての明確な記述を欠く『コーラン』と、直接・間接の言及を含む『ハディース』(例えば「他人の家に入る許しを求めること」五一章)を車の両輪とするイスラムにおいては、墨守から無視まで様々なヴァリエーションがあるようだ。

いずれにしても「女性割礼」が「書かれていない」のは厳然たる事実だが、ジュネップの注記は陰核の長さに及び、それにも甚だしい個人差と人種差を認めている。或いは施術

を必要とするケースもあるかも知れないが、この映画が訴える女性性器のあらゆる部位に加えられる「不具化のための不具化」が、ピュリフィカシオン(浄化)と強弁されている現実を「知る」者の限りなく多からんことを願わずにはいられない。

長い長い蛇足を結ばねばならぬ。ダヴィデは当然生後八日目にして割礼を受けていた筈なのに、フィレンツェ・アカデミア美術館に屹立する大理石像の股間は、なぜ「無割礼者」としか思えぬ形状を誇示しているのだろうか？

(長野・十念寺住職)

不思議な「仏縁」に高ぶる心を抑え、緊張のうちに私は枕経の回向をしていた。

所は増上寺の書院。

俗名は藤山愛一郎氏。

中学校への行き帰りに、ある大邸宅の前を通っていた。その敷地はその隣、現在の八芳園と同じ位の広さだと聞かされ、どういう人の住いなのか、世の中には凄いい人もおられるものだと感じて毎日お屋敷を眺めていた。そのうちに父が教えてくれた。藤山愛一郎という人で、自由党の衆議院議員さんだよ、と。

復員後、更に立派になったお屋敷に、今更ながら感じ入り、一目でもお会いしたいと叶わぬ願いをつのらせていた。五年の長い間、馴染んできたお屋敷だったから、そのご主人に親近感を抱くようになったのだろう。

総理大臣を目指しておられたようだが、外務大臣をもって政界を引退された後、広大な邸宅を整理して簡素な所へ移られた。清廉潔白な方で、殆どの財産を政治に費消されたと新聞が報じ、その人柄を称えていた。

その邸宅の跡はいま「都ホテル東京」となっている。

中学生以来、尊敬し憧れていたその方と遺影ではあるが、半世紀近くも経ていまお会いできたのである。

不思議な仏縁と感激し、万感をこめ涙と共にお念仏を捧げていた。

二十年ほど前のことであるが、当時私は増上寺の役職にあり、故藤山氏の葬儀はここで営まれたのだった。

長い人生、どういう方と巡り合うかもしれない。一期一会、仏縁を疎かにしては、と心に刻んだ。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●ふくらむ

〔特選〕
初東風にふくらむ力士幟かな

河合富美枝

初場所だから東京である。一年の初めというので、力士の意気込みも違うだろう。東風とはいえ風は寒いが、ひるがえる幟には胸を踊らせるものがある。「ふくらむ」にはこういう気持ちが含まれているのだろう。

〔佳作〕 ほつほつとふくらみ初むる猫柳

佐藤 雅子

梅が香の闇ふくらみておりにけり

内藤 隼人

沈丁の蕾ふくらむ二つ三つ

伊藤寿美子

●眠り

〔特選〕
好きになだけ眠らせておく合格子 片桐てい女

受験の日から待ちに待った合格発表の日である。合格を知ってやれやれと思うと、気持ち張りとめていただだけに、疲れも一気に出

今月の兼題

「子」

「壁」

選者=増田河郎子 自由題句

〆切は2006年5月20日

〈特選〉

通院と書きこて春立つ日の日記

北川 弘子

●自由題

〈佳作〉

ビル街は眠る墓地なり鳥曇り

新島美智香

うとうとと眠りし老婆日向ぼこ

井村 善也

日向ぼこ背を伸ばしては猫眠る

石原 新

よう。今はもう眠るだけ眠らせておくのがよい。家族の心遣いである。

何日か置きの病院通いだらう。それが立春の日にも回ってきたのだ。病状に大きな変化がなければ、日記には短く「通院」と記すだけである。寒さもあと少しで緩んでこよう。快方に向かう望みも感じさせる。

〈佳作〉

歩行ままならぬ夫あり春立てり

中島富士子

ようやくにもらいたる雨大根抜く

浦田 ちゑ

野良猫に投げし石ころ草芽ぐむ

一丁田美恵

平成18年度

仏教講座

当会会員・梅窓院主催の
仏教に興味のある方を対象とした
仏教講座を紹介します。
各講座とも一話完結で、しかも無料
参加しやすい講座です。
お気軽にご参加下さい。

法然上人と浄土三部経

新井俊定 (天然寺住職・大正大学出版会主管)

5月29日(月)「無量寿経」

7月25日(火)「観無量寿経」

9月11日(月)「阿弥陀経」

仏・菩薩—その教えと信仰

勝崎裕彦 (香蓮寺住職・大正大学教授)

4月13日(木)「大乘の菩薩—智慧と慈悲の教え」

6月22日(木)「日本仏教の仏・菩薩信仰。—如来について」

8月24日(木)「菩薩信仰Ⅱ—菩薩について」

中国の名寺・名山

阿川正貫 (浄土寺住職・大正大学講師)

4月20日(木)「九華山と地藏菩薩」

6月16日(金)「廬山と慧遠」

8月18日(金)「天台山」(予定)

- 時 間：午後6時～8時
- 場 所：梅窓院 観音堂
- 受講料：無料
- 申込み：03-3404-8447へ電話で申込み
03-3404-8446へFAXで申込み
s-horiuchi@baisouin.or.jpへEメールで申込み
- 問合せ：03-3404-8447(梅窓院・仏教研究所)
<http://www.baisouin.or.jp>(梅窓院ホームページ)

さっちゃんはネッ

30 かい

かまち♡ふらう



順風も逆風も問わないこのばり 岱潤

三年前に代替医療の連載をお願いした

井上朝雄氏の紹介で、牧野持侑氏というクリスタルボールの演奏家とお会いした。それまでクリスタルボールなる楽器を見たことも聴いたこともなかったが、これは水晶を粉末にして型に入れ、四千年の高温で成形して料理に使うボウルのようなものにしたもので、それを叩いたり、こすったりして出す音色、響きは、実に透明感に溢れ、音だけでなく床面からも響き伝わり、心と身体を癒して不思議な気持ちにさせてくれた。

このクリスタルボールが何故癒しの効果があるかといえ、それは倍音を発生

しているからだそう。現在医療器具としても使われているという。

音楽に疎い筆者は、バイオンという言葉も初めて聞いたが、聞きかじりで言えば、低い音であつても振動数はその倍の高い音が出ていることで、倍音によって人間の体の中の水分が振動して、調律が行われるという、これが癒しになるということだ。

そして修行した僧侶の声も倍音を発生するという。だから意味のわからないお経を聞いている人が、癒されるのはそのためだ。お経はテクニクではなく、毎日の修行の賜物だということを改めて理解した。

(長)

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山・清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村真道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十二巻五月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十八年 四月二十日
発行 平成十八年 五月一日

発行人 真野龍海
編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五〇〇一一
東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三三七八 六九四七
FAX 〇三三三七八 七〇三六
振替 〇〇一八〇、八、八二七

ホームページ <http://gekkann-jodo.info>

月刊 浄土 800 号記念事業



法然上人讃仰会のホームページご紹介

法然上人讃仰会の機関誌月刊『浄土』は会員の皆様方のお力添えで本年の2/3月合併号で通巻800号を迎えました。執筆に携わっていただいた先達善知識は1700名を超えております。

讃仰会ではこれら創刊号から現在に至る月刊『浄土』800冊以上、総35000ページあまりの貴重な財産をPDF化しインターネットを通して全国の会員の皆様に自由にお読みいただけますように準備しております。現在360冊ほどがお読みいただけます。

効果的な使用方法といたしましては「<http://gekkkan-jodo.info>」にアクセスし、月刊「浄土」検索から目次検索で氏名やタイトル名で検索し、表示された検索結果かから読みたい浄土を選択すれば目次一覧がでできます。そのページの表紙下部の「>>PDF」をクリックすればPDFファイルが表示されます。お読みいただくにはPDFビューアなどのアプリケーションが必要です。詳しくは、月刊『浄土』PDF一覧「<http://pdf.gekkkan-jodo.info>」をご覧ください。

これを機会にお近く一人でも多くの方々に月刊『浄土』をお勧めいただき、法然上人讃仰会の会員にご勧誘いただければはなはだ幸いに存じます。

法然上人讃仰会スタッフ一同

法然上人鑽仰会の

本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47 × 59 cm

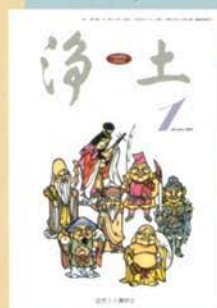


選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)

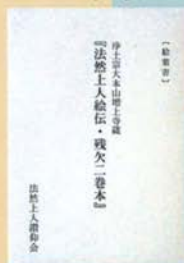


『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話 / 03-3578-6947

FAX / 03-3578-7036